

発問の役割

発問をするときの注意事項

発問の仕方によっては、子どもがとまどったり、やる気を失ったりすることがあります。その際は、子どもの反応に十分注意して直ちに修正するようにします。

- (1) センテンスが長い発問
意味がわかりにくく、教師の一方的な授業になりやすくなります。
- (2) 単発で思いつきのような発問
問いと答えが一問一答式になりやすく、子どもの思考の広がりが失われます。
- (3) 子どもの答えを復習する発問
子どもの話し合いが成立せず、子どもの集中力が下がります。授業時間も効率がよくありません。
- (4) 学習目標につながらない発問
子どもの応答に引きずられ、どこを学習しているのかわからない発問がこれにあたります。
- (5) 子どもに何を期待するのか不明な発問
教師の要求が多すぎること、すべての子どもが理解できず意図不明な学習になります。
- (6) 「ほかにありませんか」という発問
教師の期待にそぐわない答えを無視することで、子どもはどう答えるか混乱してしまいます。
- (7) 理解しにくい言葉の発問
地域や生活実態にそぐわない言葉、学年の発達に適合しない言葉の使用がこれにあたります。
- (8) 教師が答えを準備している発問
多くの子どもが答えを発表しても、教師が答えを板書することになるため、子どもの思考と存在を無視した学習に陥りやすい。

発問の役割

発問はむずかしいものです。例えば、二つの発問があります。どちらをどのような場面で使うとよいのでしょうか。

「〇〇のことが書いてあるのは、何段落目ですか。」

「△段落は、何について書かれていますか。」

一見、同じように見える二つの発問ですが、授業者の意図は違います。前者は段落同士のつながりを学ぶときに大切です。後者は、その段落の要点をもとに文章構成をつかむときに有効です。この1時間で、子どもと学ぶことは何かを考えるとときに発問がとても大切になってきます。

しかし、どんなに吟味に吟味を重ねた発問であっても、それを言葉にする先生の人間性によって受け止める子どもの反応は全く変わってしまいます。その大切な発問に至るまでに、先生の目が見取っているか、発問をするときの音声、しぐさ、目の位置、間など、単に言葉を発するのではなく、子どもとの通じ合いの中でこそその発問であることを忘れないようにしたいものです。

発問上手になるために

- (1) 主発問は精選して
主発問は、その時間の学習課題・めあてに直結するものです。したがって、一つか二つになります。主発問が四つも五つもあると、ピンとがずれて、課題やめあてから外れた学習になってしまいます。
- (2) 発問の言葉を吟味して
発問の言葉は、音声であるため、時として消えてしまい、意図が伝わりきらないときがあります。そこで、きちんと板書をしておくといいかもかもしれません。また、学年によって、使うべき言葉、使うには早すぎる語句もあるので、十分に吟味をして、ふさわしい言葉で発問をするようにします。
- (3) 子どもの反応をしっかりと評価して
教師は、自分が発問をすると、その意図に即した答えのみを取り上げて学習を進めがちです。一人一人の反応をしっかりと受け止め、学習の中で価値づけをしてあげることが大切です。どの子どもにも先生の発問に答えてよかったと思わせることが、次の学習への意欲づけにつながります。